

## 比喩表現について (17)

— フランス語, 英語, ドイツ語と日本語の故事・諺・成句に見られる  
飲み物の語彙による比喩表現を中心として —

小倉博史

〈Résumé〉

Le café est une boisson liée à la vie des Français depuis longtemps. le café du commerce est l'enseigne assez fréquente de cafés, brasseries, symbolisant ce lieu où la petite bourgeoisie parle politique dans les conversations animées. **prendre son café** signifie «prendre du plaisir, passer un moment agréable». Mais **le café du pauvre** indique «acte sexuel», qui procurait un plaisir gratuit pour les personnes qui ne pouvaient s'offrir ce breuvage luxueux dans des temps plus lointains. En anglais, **coffee and cakes** signifie «recevoir un salaire de misère». En allemand, Kaffee est une boisson mais **Kaffee tante** indique (une tante portée sur le bavardage). Concernant le thé, en français, dire **ce n'est pas ma tasse de thé** indique (quelque chose que l'on aime pas), alors qu'en anglais, **one's cup of tea** montre (une activité plaisante). Un jus, dans la langue argotique française signifie «chic, l'élégance» **jeter son jus** c'est «être très élégant». Mais **avoir du jus du navet**, c'est «manquer de vigueur ou de courage». Un navet ne produisant pas de jus, il s'agit d'une métonymie portant sur la force ou la volonté d'agir. Le vin est lié à l'ivresse, et **avoir le vin gai (ou triste)** c'est se trouver dans un état joyeux (ou mélancolique). **cuver son vin**, c'est dissiper son ivresse en dormant ou en se reposant» alors qu'**être entre deux vins** signifie être entre la lucidité et l'ivresse complète. Si l'on veut modérer ses exigences ou être moins absolu, alors il est nécessaire de **mettre de l'eau dans son vin**, en allemand **im Wasser in seinem Wein gießen** (= verser de l'eau dans le vin de l'autre) indique (l'on cherche à décourager quelqu'un). Pour le whisky, en anglais il y a des noms de voix liés après avoir trop bu du whisky, boire trop de whisky a peut-être pour effet d'entendre des voix, mais aucune expression en français ou en allemand n'existe avec le nom de cette boisson alcoolisée.

l'autre

En japonais, il y a quelques expressions liées au thé, mais aucune concernant le sake (nihonshu).

### 0. はじめに

「人間の文明は、三種類の重要な非アルコール飲料を生み出してきた。茶葉から抽出したもの、コーヒー豆から抽出したもの、そしてカカオ豆から抽出したものである。葉と豆は、世界で好まれている非アルコール飲料の源である。抽出飲料の総消費量のうち、茶葉が一位であり、コーヒー豆が二位、そしてカカオ豆が三位である。手っ取り早い反応を求めて人々は今でもアルコー

ル飲料に頼っている。それは擬似的な興奮剤であり、しばしば麻酔薬であり抑制薬でもある。茶、コーヒー、ココアは、心臓と神経系と腎臓に対する真の刺激剤である。コーヒーは脳を刺激する作用が強く、ココアは腎臓への刺激作用が強い。茶はコーヒーとココアの間で幸せな地位を占めている。私たちの身体機能の多くを優しく刺激するのである。かくしてこの「東洋の恵み」は、非アルコール飲料の中で最高の物となった。自然自体の製薬工場で調合された純粋で安全で有用な刺激剤であり、人生で最高の喜びの一つである」<sup>1)</sup>

「世界のアルコール文化は、フランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ギリシアなどの南欧中心とした『ワイン文化圏』、英国やオランダ、スカンディナヴィア諸国など北欧を中心とした『ウイスキー文化圏』、ドイツ、チェコ、オーストリアの中欧諸国と米国などの『ビール文化圏』に大きく区分される。(中略)ワイン文化圏は、食事内容が豊かで農耕文化が早くから発展し、産業革命後はそれほど工業化がすすまなかった地域、さらに宗教的にはカトリック文化圏と重なるのである、逆にうまいものが少なく、工業化が急速にすすんだプロテスタント文化圏では、ウイスキーないしはビールを好む傾向がある。これにはブドウ栽培の北限やウイスキー原料である大麦の栽培条件、さらに寒さとアルコール分の高い飲料を好むという相関性など、気候や風土に負うところが大きいことはいうまでもない。」<sup>2)</sup>

本稿では、フランス語、英語、ドイツ語、日本語の故事、諺、成句にみられる飲物名による比喩表現を比較し、フランス、イギリス、ドイツ、日本の文化の違いについて論じることにする。

## 1. 飲み物名によるフランス語の成句

### 1) café・コーヒー

人類発祥の地ともいわれる古代アビニシアは、今ではエチオピアと呼ばれているが、この地こそがコーヒーの生まれ故郷である<sup>3)</sup>。

フランス人がコーヒーを飲みはじめたのは、彼らの後の熱狂ぶりを考えれば意外なことだが、イタリア人やイギリス人より遅かった。1669年に、新任のトルコ大使ソリマン・アジャが、パリで盛んに豪華なパーティーを開いてコーヒーを紹介し、熱狂的なトルコ・ブームを巻き起こした。男性客はゆったりとした部屋着を与えられ、贅沢な調度品に囲まれて、椅子なしで気持ちよくくつろぎ、珍しい異国の飲み物を楽しむようになった。といっても、まだ目新しさの域を出ていなかったが。フランスの医師たちは、コーヒーに薬効があるという主張に脅威を覚え、1679年にマルセーユで反撃を開始した。「恐ろしいことに、この飲み物は… [中略] …ほぼ間違いなく、人々にワインを楽しむ習慣を止めさせる傾向を有する」(中略)だがその6年後には、別のフランス人医師シルヴェストル・デュフルが、コーヒーを熱烈に擁護する本を書き、また1696年に、あるパリの医師は、「腸の下部をすっきりさせ、顔の色つやを良くするために」コーヒーによる浣腸を処方している<sup>4)</sup>。

[大げさだ]

C'est (un peu) fort de café (このコーヒーは少し濃すぎる→) 大げさだ, やりすぎだ,  
信じられない

[巷の政治談義]

des discussions de café du Commerce (café du Commerce はどこにでもあるカフェーの  
屋号で, ここでは界限の溜り場の意。巷の溜り場の議論→) 巷の政治論議

[楽しむ]

prendre son café

(自らのコーヒーを飲む→) いつものコーヒーを飲む, 楽しむ, 快樂の時を過ごす

[いいことは長続きしない]

Racine passera comme le café.

(コーヒーの流行同様ラシーヌも廃れよう→) 世の中うまくいっている時期は短いもの  
だ, (成功は長続きはしないのではと思っている人に) その通りであると皮肉に言う  
言葉, 間違ってセヴィニエ夫人の言葉とされている

[性行為]

café du pauvre (貧乏人のコーヒー→) 性行為

[はした金]

(英) coffee and cakes (コーヒーとケーキ→) 安サラリー [ギャラ], はした金

[相談のため]

(独) Kommen Sie bitte zum schwarzen Kaffee 食事のあとにブラックコーヒーでも飲み  
において

(独) Kaffee tante おしゃべりばばあ

## 2) thé・紅茶

「茶の飲用は, 東洋が西洋に最も気前よく分け与えてくれた, 節度あるすばらしい習慣の一つである。しかし, ヨーロッパ人が茶について知ったのは, 東洋で茶が広く用いられるようになってから何世紀も経ってからのことだ。世界の三大非アルコール類飲料であるココアと茶とコーヒーの中で, 最初にヨーロッパにもたらされたのはココアである。ココアは 1528 年にスペインに持ち込んだ。その約一世紀後の 1610 年に, オランダが茶をヨーロッパに持ってきた。コーヒーがヴェネツィア商人によってヨーロッパに持ち込まれたのはそのほんの数年後の 1615 年のことだ。ヨーロッパの文献の中で最初に茶について言及したものは, 1559 年頃に現われた。それは, ギラムバチスタ・ラムジオ (1485~1557) の『航海と旅行記』の中で「中国茶」と書かれていた。ラムジオは, 古代と現代の航海と発見の話を集めた貴重な著書を刊行した, 有名なヴェネツィアの作家である」<sup>5)</sup>

[趣味]

Ce n'est pas ma tasse de thé.

(これは私の紅茶ではない→) それは私の趣味ではない

(英) one's cup of tea (人の紅茶→) 好み, 興味, 趣味

「フランスはコーヒーの国で、滝沢敬一の『フランス通信』によると「フランスで茶というと煎茶の如く、イギリスでコーヒーはにがい墨汁にすぎない。(中略)イギリスでは大人はもちろんのこと、子供でも味のいい紅茶のいれ方についていっぱしの知識をもつようになった。彼らは世界中のどこの国よりも、紅茶のいれ方や飲み方について、すぐれた心得があると自信をもって、それを芸術だと思っている。」<sup>6)</sup>

上記の表現は紅茶に対する両国の関わりを考えると、英語の表現が起源であろう。

[罰せられる]

(英) go (out) for one's tea (人のコーヒーのために出ていく→) 危険な使いにいく, 連れ出されて罰せられる [絶対に…しない]

(英) not for all the tea in China

(どんな褒美をくれても) 絶対に～しない

[交際する]

(英) take tea with (～と一緒にお茶を飲む→) 交際する

[別問題]

(英) That's another cup of tea (それは別の紅茶だ→) それは別問題だ

### 3) jus・ジュース

[生気がない]

avoir du jus de navet dans les veines

(血管にカブのジュースをもつ→) 生気がない

[大したものだ]

Ça vaut le jus.

(ジュースの価値がある→) やってみるだけの値うちがある, 注目に値する, 大したものだ

[暑い]

cuire dans son jus

(ジュースの中で火が通る→) 暑くてたまらない

[粹である]

jeter un [son] jus (ジュースを投げる→) しゃれている, かつこいい, 粹である

[成り行きを待つ]

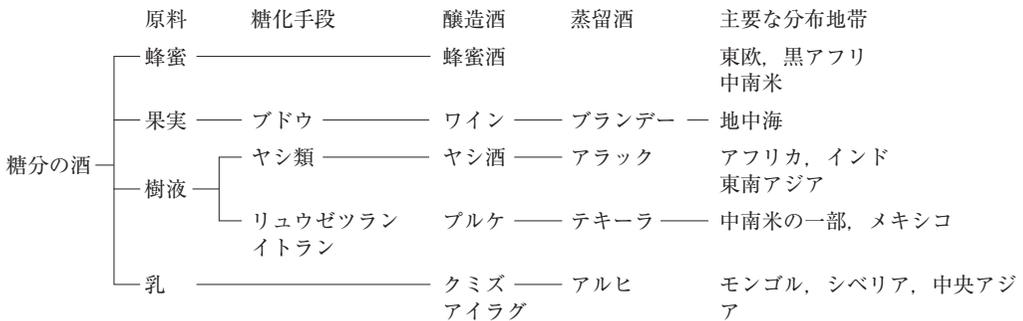
laisser qn/qc cuire [mijoter] dans son jus

(ジュースの中で火が通るがままにしておく→) …を勝手に苦しませておく、の展開を見守る、成り行きを待つ

4) vin・ワイン

「ワインという飲物は、葡萄の果実の生れ変わり、という考え方は非常に古く、またワインが人間の健康にすぐれた効果があることも、ワイン誕生の太古から人々は気づいていたようですから、ワインを造り出す樹である葡萄樹のことを、シュメール人も古代エジプト人も「生命の樹」と呼んだのです。(中略) 古代エジプトの造物のうちで最も古い記録が、紀元前 2850 年頃の酒壺の上の象形文字でイルプ IRP と発音されるワインの事ですが、このイルプがすべてのワインの語源になったかどうかは不明です。もう少し新しい時代の遺物と思われるのが、紀元前 1400 年頃のウガリット楔形文字です。死滅した言語ですから、正確な発音ははっきりしませんが、おそらく YAINU ヤイヌと発音されるといわれています。したがって、ヤイヌがエジプトでイルプとなまったのか、その逆であるのか、あるいはこの二つの古代語は互いに何の関連性もないものなのか、明らかではありません。(中略) 聖書に出てくるヘブライ語では JAJIN, YAYIN または YAIN などとなりますが、これらがいずれも古代ギリシア語の WOINOS (語尾が -OS) となり、ラテン語の VINO となり、さらに今日の VIN (フランス語) や WEIN (ドイツ語) と受け継がれたものでしょう。」<sup>7)</sup>

「酒のアルコール分は糖類が酵母の作用によって醗酵することによってつくられる。そこで糖分の酒とよんでいる蜂蜜、果実、樹液、乳を原料とする酒は、とくべつにスターターを加えなくても、原料の糖分を含む液体に、自然界に存在する酵母が作用してアルコールが生成される。しかし、澱粉を原料として酒づくりする場合は、澱粉を糖分に変化させる手続きが必要である。そのために、唾液、もやし、カビなどをスターターとして加え、その酵素の作用で澱粉を分解しなければならない。唾液をスターターとする酒は白人の渡来以前から中南米に広く分布していた。東アジアでは、日本の古代に存在したし、十三世紀のカンボジア、沖縄、アイヌの人びと、中国の辺境地帯、台湾の高山族にもあったことがわかっている。」<sup>8)</sup>



澱粉の酒	穀類	トウモロコシ	唾液	チチャ	中南米	
	芋類	マニオク				
		オオムギ	もやし	ビール	ウイスキー	北西ヨーロッパ
		雑穀	もやし	ポンペ		黒アフリカ
		主として米	カビ	黄酒 (中国)	白酒 (中国)	東アジア, 東南アジア
			清酒	焼酎		世界の伝統的な酒の類型 <sup>9)</sup>

## [酒癖]

avoir le vin gai [triste, mauvais]

(陽気な [寂しい, 悪い] 酒をもっている→) 笑い [泣き, 怒り] 上戸である

## [酔いを覚ます]

cuver son vin (ワインを和らげる→) (休息や睡眠で) 酔いを覚ます

## [ほろ酔い]

être entre deux vins

(二本のワインの間に入る→) ほろ酔い加減である

## [諺]

Le bon vin réjouit le cœur de l'homme.

よき酒は人の心を楽しませる

## [不快]

(独) im reinen (Klaren) Wein einschenken ある人に本当のことを言う (その人に不快です)

## [諺]

(独) Im Wein ist Wahrheit (ワインの中に真実がある→) 酒中に真あり (酔えば本音が出る)

## [水を差す]

(独) im Wasser in seinum Wein gießen (人のワインに水を注ぐ→) ある人の感激に水を差す

## [不節制する]

(独) Wasser predigen und Wein trinken (水を説き聞かせワインを飲む→) 人には節制を勧めて自分は不節制する

## [控え目]

mettre de l'eau dans son vin

(ワインに水を加える→) 主張を和らげる, 態度を軟化させる, 控え目になる

## [栄華の時]

(英) days of wine and roses (ワインとバラの日々→) 栄華の時

[乾杯]

(英) take wine with (〜とワインを飲む→) …と (健康を祝して) 乾杯する

[歓楽]

(英) wine, women, and song (酒と女と歌→) 歓楽, 道楽

[豪勢な会食をする]

(英) wine and dine/dine and wine (食べかつ飲む→) 豪勢な会食をする

## 5) bière・ビール

「ケルト人(ガリア人)がフランスに移住を開始したのは西暦前 1600 - 1300 のあいだだったとみられている。古代のガリアは現在のフランスよりはるかに広い地域で、東はライン川にまで及んでいたから、その土地の住民の飲んでいた酒は北欧のゲルマンと同じようにビールであった。ビールはラテン語でケレヴィシア(cerevisia)といていた。「ケレ」は収穫の女神ケレスからでた語でガリアではそれをラテン語のまま「ケレヴィシア」または「ケレ・ヴィシア」(cerevisia)といていたので、のちフランス語の「セルヴォアーズ」(cervoise)になった。セルヴォアーズはホップを入れない時代の名前で、16世紀の前半にホップを入れたビールをビエール(bière)と呼ぶように変わった。その語源はオランダ語のbierだったと、語源学者アルベール・ドゥザはみている。」<sup>10)</sup>

「ビエール(bière)の呼び方はフランスでは1435年の古文書にでてるのが最初とみられているが、ドゥザ(語源学者)は1539年にはじめて登場したといている。その一方でセルヴォアーズという呼び方は12世紀から17世紀までつづいたというから、16-17世紀には両方の呼び方が行なわれていたことがわかる。」<sup>11)</sup>

[酒癖]

avoir la bière + 形容詞 ビールを飲むと…になる

Il a la bière plutôt gaie et le vin triste.

彼はビールを飲むと陽気になり、ワインを飲むと陰気になる

[ただものではない]

Ce n'est pas la petite bière

(それは弱いビールではない→) ただごと [ただ者] ではない

She is no small beer. (彼女は弱いビールではない→) 彼女はひとかどの人物だ

[へたくそな絵]

enseigne à bière (飲み屋の看板→) へたくそな絵

[酔う]

(英) be in beer (ビールの中にいる→) (ビールに) 酔っている

[惨めな思いになる]

(英) cry in one's beer (人のビールの中で叫ぶ→) 悲しみにうちひしがれる, 惨めな

思いになる

[飲む]

(独) beim Bier sitzen (ビールの傍にすわる→) ビールを飲んでいる (特に飲み屋で)

(独) Bierbankpolitiker 飲み屋の政治家 (一杯きげんで政治を論じる)

[低い声]

(独) Bierbaß 粗くて低い声

(独) Bierfaß ビヤだる, たいこ腹 [の人]

「ドイツがビールの国であることは周知のごとくであるが、北欧諸国やイギリスではブドウ酒を産出しないのに対し、ドイツはブドウ酒の国でもあるので、この国の酒の歴史はかならずしもビールだけの歴史ではなかった。『ドイツ人の飲みものにビールが勢力をもちだしたのは比較的新しい現象で、その歴史は二百五十年以前にはさかのぼらない。さらにこの国でもっばらビールだけが飲まれるようになった歴史では、その期間はさらに浅い』とハインリッヒ・エドワルト・ヤコブは述べている」<sup>12)</sup>

「ドイツではまたビールにちなんだ苗字 (姓) の多いことでも、奇妙な地位を占めている。「ビール商」「ビールの首」「ビールの友達」「ビール運搬馬車」「ビールの水溜り」「ビールの袋」といったのがその一例で」<sup>13)</sup>

## 6) whisky・ウイスキー

「スコットランドにウイスキー造りが伝わったのはいつ頃のことなのかはっきりしないが、少なくとも西暦 12~13 世紀頃までには伝わっていたとする説が有力である。当初はビール (エール) と同じように、修道院などがもっばら「薬酒」としてつくっていたと考えられている。文献に登場する最古の記録は 1494 年のスコットランド王室財務係の記録で、「修道士ジョン・コー (John Cor) に八ボルの麦芽を与えてアクアヴィテを造らしむ…」とある。「ボル」は穀物などを量る古い単位で、八ボルで約 500 キログラムに相当する。「アクアヴィテ」(あるいはアクアヴィータエ Aqua Vitae) はラテン語で「生命の水」を意味し、これがウイスキーのみならず、すべての蒸留酒の語源となった。ウイスキーはアクアヴィテをゲール語 (スコットランドの母語) に置き換えた「ウシュクベーハ (Uisge Beatha)」(ウシュクは水、ベーハは生命のこと) から派生した言葉だが、実際に「ウイスキー」なる言葉が英語に登場した (一般に使用され始めた) のは、18 世紀後半のことという。<sup>14)</sup> ちなみに、フランス語では eau-de-vie 「命の水」はブランデーの意である。

[テノールの声]

(英) whisky tenor (酒の飲みすぎでしゃがれたような) テノールの声

(英) whisky voice しわがれ声, ハスキーボイス

## 2. 飲み物名による日本語の成句

### 1) お茶・thé vert

日本のお茶は、抹茶を中心に茶湯という形式をかたちづかった点において、世界の茶の文化史上、特筆に値するといえよう。平安時代のはじめ、唐風文化の一として、中国に学んだ茶は、磚茶であったろうと推測されている。しかし、その命脈はみじかく、日本の茶の文化は、鎌倉時代のはじめ、宋よりもたらされた抹茶法の普及によって、あらためて開始された。

抹茶法－粉末にした茶葉に湯をそそぎ、攪拌してのむ喫茶法は、本国の中国ではつとにたえ、現在では日本にしかつたわらない。しかも日本ではそれを茶湯という儀礼にまで発達させることに成功したのだった。その完成期は、一先ず戦国時代末（16世紀）とおさえてよい。それと併行して、庶民の間では煎物のひとつとして、葉茶飲用の習慣が広まりつつあった。日常茶飯事は、抹茶ではなく、葉茶の普及によって実現された。そして日本の茶業地が全国に拡大するのは、江戸時代のことである。茶業地の拡大は、「茶を飲むくらし」のひろがりやをうながす。江戸初期の幕府の法令は、茶を飲むことを、贅沢の見本のようにいっている。しかし、江戸時代も後期になれば、庶民が茶をのむことは、それこそ、日常茶飯事となっていた<sup>15)</sup>。

[口先だけのお世辞]

お茶でも上げれ：口先だけのお世辞に言うことば。

[俗説]

お茶の軸が立つと思う事がかなう

[つくろう]

お茶を濁す：いい加減な処置をして、一時のがれにその場をごまかすつくろう

[暇なこと]

お茶を挽く：芸妓や娼妓が客がなく暇なことにいう。このことばの起りとしては、客のつかなかった遊女が茶臼で葉茶を挽かされたことからいうとする説や、昔の遊女は貴人に召されてお茶の相手をするのがあったので、それに召されず暇な傾城をこういうようになったとする説など種々ある。

### 2) お酒・saké

御神酒は、その表示からして清浄な酒という意が明らかである。が、そもそもサケ（酒）という言葉そのものが清浄な響きをもっているのである。サは接頭語。ケは『広辞苑』をはじめ辞書では、「香」と同原、と説明する例が多い。しかし「食」、あるいは「饌」としてもよいのではないか。「御食（みけ）」の食である。接頭語も、ただ語調をととのえるだけではあるまい。「斎庭（さにわ）の斎と同様に、「斎食（さけ）」と書いてみるとどうだろうか。清らかな食べもの、と相なる<sup>16)</sup>。

[俗信]

お酒の爛をするとき仏さんの花瓶の水を少し入れると大酒を呑まなくなる：播州赤穂地方の俗信

### 3. おわりに

café は古くからフランス人の生活に密着し、Commerce というカフェーの屋号から溜り場のコーヒーから巷の政治論議の意、自らのコーヒーを飲むから快樂のときを過ごすの意、同様に貧乏人のコーヒーから性行為の意、英語ではコーヒーとケーキから安サラーの意、ドイツ語ではコーヒーが社交の場の象徴であることから相談の意やカフェーのおばさんからおしゃべりばばの意。thé についてはフランス語では私の紅茶、英語では人の紅茶から、両言語とも趣味の意であるが、両国と紅茶との関わりを考えると、英語の表現が起源であろう。英語では一緒に紅茶を飲むから交際するの意であることから、紅茶はイギリス人の生活に密着していることがうかがえる。jus については、フランス語では隠語でシックな、エレガントなの意であることから、ジュースの価値があることから注目に値するの意、ジュースを投げることからしゃれている、粹であるの意。血管にかぶのジュースをもつから生気がないの意。これはジュースではなくかぶ (navet) に由来している。vin については vin が「酔い」のメトノミーであることから、陽気な (寂しい) ワインを持つから笑い (泣き) 上戸の意である。自分のワインを和らげる (醸造桶の内部のように休ませておく) から酔いを覚ますの意。二つのワインの間にいるというのは正気と酩酊の間にいるから微酔い加減の意である。ワインに水を加えるから、フランス語では主張を和らげるの意、ドイツ語ではある人の感情に水を差すの意。ドイツ語ではギリシア語の格言のラテン語訳 in vino veritas (ワインの中に真実がある) から酔えば本音がでる。英語ではワインとバラの日々から栄華の時の意。人とワインを飲むから乾杯するの意。wine と dine の語呂合わせから豪勢な食事をするの意。bière については、フランス語では 17 世紀の表現では petite bière は forte bière (強いビール) の反意語であったことから、フランス語と英語では弱いビールではないことからただ者ではないの意。フランス語ではビールの看板 (つまり飲み屋の看板) からへたくそな絵の意。英語では人ビールの中で叫ぶから悲しみにうちしがれるの意。ドイツ語ではビールの傍にいるから飲み屋でビールを飲んでいるの意。ビールの政治家、つまり飲み屋の政治家から一杯機嫌で政治を論じるの意。ワイン、ビールについてはフランス語、英語、ドイツ語にも僅かではあるが、表現はある。ドイツ語ではビールに因んだ苗字が多くみられるのが特徴である。whisky については、英語ではウイスキーの飲み過ぎによる声の変化に因んだ表現はあるが、フランス語、ドイツ語にはみられない。日本語では、お茶による表現は僅かではあるがみられるが、日本酒による表現はみられない。

[注]

- 1) W. H. ユーカス著, 杉本卓訳:「ロマンス・オブ・ティー」八坂書房 pp. 5~6
- 2) 辻原康夫著:「世界地図から食の歴史を読む方法」KAWADE 夢新書 pp. 90~91
- 3) マーク・ベンダグラスト著, 樋口幸子訳:「コーヒーの歴史」p. 26
- 4) 1689年にイタリアからの移住者フランソワ・プロコプが, コメディー・フランセーズの真ん前に, カフェ・ド・プロコプを開店した。世に名高いコーヒーハウスがようやく根付いたわけである。さっそく役者や作家, 劇作家, 音楽家たちが集まって, コーヒーを飲み, 文学談義に花を咲かせた。18世紀に入ると, ヴォルテールやルソー, デイドロ, それにフランス訪問中のベンジャミン・フランクリンといった名士たちが盛んにカフェに出入りした。(中略) フランスの歴史家ミシュレは, コーヒーの到来を「当代の喜ばしい革命であり, 新たな習慣を作り上げた重要な出来事であり, 人間の気質を改変したと言っても過言ではない」と書いている。確かにコーヒーはアルコールの摂取量を減らすと同時に, 最終的にはフランス革命という怪魚を生むに至る知的な生け贄を創り出した。ヨーロッパ大陸のコーヒーハウスは平等主義者の会合場所となり, 食物研究家のマーガレット・ヴィッサーが書いているように「男女はそれ以前にはなかった形で, 不穏当と見なされずに交際できた。公然と会って話ができるようになったのだ。(中略) 1710年にフランス人は初めて, コーヒーを煮出すのではなく, 浸出する方式を採用した。挽いたコーヒーを布袋に入れ, そこに湯を注ぐやり方である。じきに, 甘味をつけた「コーヒー入り牛乳」または「牛乳入りコーヒー」という楽しみ方も開発された。セヴィニエ侯爵夫人(17世紀フランスの書簡文学者)は, この種のコーヒーを「世界で一番すばらしい飲みもの」と記しており, 多くのフランス市民が, 特に朝食にカフェオレを飲むようになった(同上 pp. 34~35)
- 5) W. H. ユーカス著, 杉本卓訳:前掲書 p. 64
- 6) 春山行夫著:「紅茶の文化史」平凡社 p. 153
- 7) 古賀守著:「ワインの世界史」中公新書 PP. 43~45
- 8) 小崎道雄, 石毛直道編:「発酵と食の文化」ドメス出版 pp. 210~211
- 9) 同上 p. 210
- 10) 春山行夫著:「ビールの文化史」平凡社 p. 163
- 11) 同上 p. 170
- 12) 同上 p. 196
- 13) 同上 p. 209 ビール商: Bierhake, Biermann, ビールの首: Bierhals, Mann「男」, hake「小売商」(古語)
  - ビールの友達: Bierfreund, Freund「友」
  - ビールの運搬馬車: Bierwagen, Wagen「車」
  - ビールの水溜まり: Bierdimpfel, Bierdumpf, Bierdumpf, Biertempfel, Biertimpel, Biertumpel, Biertumpel, dimpfel, dumpfel, dumpfl, tempfel, timpel, tumpel, tumpfelは, いずれも「水溜まり」の意の方言あるいは古語
  - ビールの袋: Biersack, Sack「袋」
- 14) 土屋守著:「スコッチウイスキー紀行」東京書籍 pp. 10~11
- 15) 守屋毅著:「お茶のきた道」p. 9
- 16) 神崎宣武著:「酒の日本文化」pp. 14~15

## [参考文献]

- 小崎道雄・石毛直道編 (1986) : 「醗酵と食の文化」, ドメス出版  
神崎宣武著 (2008) : 「酒の日本文化」, 角川ソフィア文庫  
蔵持不三也著 (1988) : 「ワインの民族誌」, 筑摩書房
- 古賀守著 (1996) : 「ワインの世界史」, 中公新書  
「小学館ロベール仏和大辞典」(1988), 小学館  
辻原康夫著 (2002) : 「世界地図から食の歴史を読む方法」, KAWADE 夢新書, 2002  
ロジェ・ディオン著, 福田育弘訳 : 「ワインと風土」, 人文書院, 1997  
春山行夫著 (1991) : 「紅茶の文化史」, 平凡社  
春山行夫著 (1995) : 「ビールの文化史 1」, 平凡社  
春山行夫著 (1990) : 「ビールの文化史 2」, 平凡社  
樋口謹一郎著 (1957) : 「世界の酒」, 岩波新書  
マーク・ペンダーグラスト著, 樋口幸子訳 (2003) : 「コーヒーの歴史」, 河出書房新社  
守屋毅著 (1981) : 「茶のきた道」, 日本放送出版協会  
W. H. ユーカス著, 杉本卓訳 (2007) : 「ロマンス・オブ・ティー」, 八坂書房  
Rey, A. et Chantreau, S (1985) : *Dictionnaire des expressions et locutions*, Paris, Robert
- 土屋守著 : 「スコッチウイスキー紀行」, 東京書籍, 2008  
講談社大百科事典, 講談社, 11 巻, 1982